

葛西用水の桜並木

葛西用水は市東部を南北に貫流する用水路で、行田市の利根大堰から引水し、市をへて足立区へと流れています。1719（享保4）年、埼玉県東部の水田かんがいのために造られました。市内では青柳から稲荷を流れて、延長は3.5kmです。かつては水田を潤していましたが、都市化によりその役割は市民の憩いの場に変化しています。コイ、フナ、タナゴなどが生息する絶好の釣り場であるほか、全国でも珍しいキタミソウが自生しています。青柳新橋周辺には1.3kmの桜並木があり、春の花、夏の木陰など四季折々の風景を市民に提供しています。

市では、葛西用水路利用整備計画を策定し、1989（平成元）年度から水と緑を生かした市民に親しまれる水辺空間として再生を図っています。整備区域を3つに分けて、1989（平成元）から2004（平成16）年に桜並木ゾーン、青柳堰ゾーンを整備しました。伊草新橋（八潮市境）から緑橋までの間は親水護岸として整備されています。青柳堰から八潮市境までの間は約450本のソメイヨシノが並ぶ名所となっています。2011（平成23）年からは、通年通水となっております。

桜並木の現状について

葛西用水沿いの桜並木は、植樹から約40年が経過し、「草加さくら祭り」が開かれるなど、桜の名所として市民の貴重な財産となっています。しかし、平成25年からクビアカツヤカミキリ[※]が発生し、樹勢を衰えさせたり枯らすなどの被害を及ぼしています。また、桜の中でもソメイヨシノは寿命が短く、街路樹としては50～60年程度とも言われています。今後、傷ついた桜の樹勢回復や活力と美観を維持する管理、さらには将来訪れる世代交代への備えなどを考えなければならない時期に来ています。



図：桜並木の位置



写真：桜並木の開花

Aromia bungii（クビアカツヤカミキリ or クビアカツヤカミキリ）について

【発生からこれまでの経緯】

平成24年愛知県において国内で初めてクビアカツヤカミキリの生息が確認されました。草加市ではその翌年の平成25年に葛西用水の桜並木で確認されています。それ以降、東京都、大阪府、徳島県、群馬県、栃木県など複数の自治体で生息が報告されており、生息域が広がりつつあるとみられています。

市では、平成26年から被害のあった桜の木にネットをかけて成虫を閉じ込める対策や、有識者による生態の調査が行われています。また、カミキリムシによる被害を注意喚起する貼紙の設置や、拡散を防ぐための見回りパトロールを実施するなど、取り組みを進めているところです。

【本年度の発生状況】

このカミキリムシは幹の内部に卵を産み付け、孵化した幼虫は樹木の内部を摂食して被害を及ぼします。別名にクロジャコウ（麝香）カミキリとあるように、捕まえると特徴的なニオイを放ちます。

幼虫は生木の内部を摂食する際にフラス（木くず）を排出し、樹木内で数年かけて成長してサナギになります。日本においては6月中旬～8月上旬頃に成虫となって樹木から外へ出ていきます。

7月にはクビアカツヤカミキリの発生状況を確認しています。現地では、桜並木全体についてヤニやフラス（木くず）の確認を行いました。この結果、カミキリによる被害や樹勢の低下が確認できた桜の本数は53本にのぼりました。

【生態系被害防止外来種リストについて】

このカミキリムシについては、平成27年3月に環境省及び農林水産省が作成した「我が国の生態系に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」に総合対策外来種[※]として記載されました。

- 体長 28～37mm
- 特徴 全体は光沢のある黒色、前胸が明赤色
- 加害する樹木 サクラ、カキ、オリーブ、ハコヤナギ、セイヨウスモモ、ウメ、モモ、ザクロ、コナラ、ヤナギなど



外来種[※]

元々その地域にいなかったのに、人間の活動によって他の地域から入ってきた生物のことを指します。

外来種が侵入し、新たな場所で生息するためには、餌をとったり、生活の場を確保したりする必要があり、もともとその場所で生活していた在来の生物との間で競争が起こります。

外来種の中には、樹木や農作物を荒らしたり、人間の食用となる生物を捕食したり、危害を加えたりするものもあります。外来種に関わる際には、右の原則を心にとめ、適切な対応とご理解・ご協力をお願いします。

■三原則

1. 入れない
～悪影響を及ぼすかもしれない外来種をむやみに日本に入れない
2. 捨てない
～飼っている外来種を野外に捨てない
3. 拡げない
～野外にすでにいる外来種は他地域に拡げない

今後、懸念される問題

このカミキリムシは桜・柿・梅・桃などの多くの樹種に寄生して被害を及ぼすことが報告されています。発生が拡大した場合、周辺で生産する果樹などへ被害が及ぶ恐れがあります。



※ 保全管理計画の策定へ

市では、

- ・カミキリムシの被害によって傷ついた桜の樹勢回復や活力と美観を維持するための管理方法の確立
- ・将来訪れる桜の世代交代への備えを考えることを課題ととらえて、桜並木の名所としての価値を高め、将来に引き継いでいくための将来計画や維持管理計画（剪定方法、植え替えルール等）を策定するために、平成28年度から次の3箇年の予定で調査・計画を進めていきます。

- 平成28年度：基礎調査、樹木初期診断、
- 平成29年度：土壌調査、樹木外観診断、樹木精密診断
- 平成30年度：将来計画、維持管理計画の策定

今年葛西用水沿いの桜並木について、資料調査、文献調査、現地調査などを実施して、桜並木に関する問題点や、桜の生育条件について把握を進めます。また、桜の木の状態を把握して、早期に対策しなければならない樹勢の悪い木や、専門的な診断を必要とする木を発見するために初期診断という樹木診断を行います。

これらに先駆けて、7月にはクビアカツヤカミキリの発生状況を確認しています。現地では、桜並木全体についてヤニやフラス（木くず）の確認を行いました。この結果、カミキリによる被害や樹勢の低下が確認できた桜の本数は53本にのぼりました。これらの結果を元に、初期診断を進めていく予定です。

※ サクラ並木ニュース第2号の発行予定

第2号の予定は、初期診断が終わった後の10月頃に予定しております。

問い合わせ先 草加市役所みどり公園課：保全・育成係
電話 048-922-1973

ソメイヨシノの豆知識

桜の木には何種類かありますが、その中でもソメイヨシノは最も人気のある桜です。漢字では「染井吉野」と書きます。東京都駒込駅前の染井吉野桜記念公園に設置されている解説板によりますと、この辺りがソメイヨシノの発祥の地ということで、「現在の東京都豊島区駒込の一部は江戸時代に染井村と呼ばれ、花卉、植木の一大生産地であった。この地で江戸時代以降数多くの優れた園芸品種が誕生したが、なかでも染井吉野は、当地の地名から名付けられ、世界を代表する桜の品種となった。」と記されています。

当初、奈良県の桜の名所である「吉野山」にちなんで「吉野桜」と命名されていたという話もあります。因みに、吉野山の桜はほとんどヤマザクラ（白山桜）です。

エドヒガンザクラとオオシマザクラが交配してできた品種とされているソメイヨシノですが、開花が見事なことが人々に好まれて、明治以降に全国中に広まりました。最大の特徴は、一斉に咲いて一斉に散ることでしょう。その理由として、ソメイヨシノが“クローン植物”だからということが言われています。交配によって生まれたソメイヨシノは種子を持たないため、接木などによって増やされたことから、遺伝的に同じクローン生物ということになります。しかし、親の寿命を引き継いでいる可能性もあり、全てのソメイヨシノが一斉に高齢化していった結果、全国のソメイヨシノが急激に枯れて絶滅するという説もあります。

～最近の動向～

お花見といえばソメイヨシノと言われるほど、全国的に広まった今日ですが、病虫害に弱く、寿命が短いことが取り沙汰されるようになったため、違う桜に更新していく動きも出てきています。

例えば「桜の名所づくり」を進めている（財）日本花の会では、ソメイヨシノに替わって、病気に強く、花と花期がソメイヨシノに近いジンダイアケボノ（神代曙）という品種への植え替えを推進しています。

上野や浅草、飛鳥山など、江戸時代から続いている桜の名所も、やがてはソメイヨシノとは別の桜になってしまう日が来るかもしれません。ソメイヨシノにはできるだけ長く花を咲かせて欲しいと思う方も多いのではないのでしょうか。

写真：葛西用水のお花見



【ソメイヨシノ】

〔特徴〕 落葉広葉樹で、樹高10m、幹回り1.5mに及ぶ高木である。

樹形は枝がやや太く、横方向に広がる。花は新葉よりも早く密生開花し、5弁の一重咲きである。エドヒガンとオオシマザクラを交配した園芸品種と言われ、短命で60年程度で老衰するとされる。

〔性質〕 陽樹。移植はやや容易。若木の生長は早い。

〔用途〕 公園樹、庭園樹、街路樹、並木、学校の外周部、社寺境内、墓地などに植えられる。

〔管理〕 アメリカシロヒトリ、ウメケムシ等の被害が出やすい。また、コスカシバの幼虫、センチュウなどの被害も多い。病気ではてんぐ巣病、紋羽病の発生が多い。

〔その他〕 日本で最も代表的なサクラの品種である。